特別支援学校と小学校の教員が連携して、情報保障に取り組んだ事例

特別支援学校（聴覚障害）の児童が居住地の小学校で筆談等を活用してコミュニケーションを図りながら進めた交流及び共同学習

○概要

Ａ児は、Ｂ特別支援学校（聴覚障害）小学部の４年生であり、居住地校交流を行っている。両耳に補聴器を装用している。気管切開していること、顎が小さく口が余り開かないことで、音声による言葉の表出は難しいが、コミュニケーションへの意欲が高く、誰とでもよりよい人間関係を築こうと積極的に行動できる。居住地校交流では、できる限りＡ児自身の力で情報を得て学習し、活動に参加できるように配慮した。交流学級担任の協力の下、手話や筆談等を活用するとともに、授業内容を事前に打ち合わせてＡ児が理解できる学習内容を選んだり、視覚教材を多く用いたりした。

また、配慮を受けるには、障害のある当事者側からの働き掛けも大切であると考え、交流学級児童に向けて、聴覚障害の理解推進学習（補聴器の試聴、話すときに気を付けること）や手話コーラスを行った。このことが切っ掛けとなり、正面から一人ずつ話し掛けてもらうことや授業中に静かにすることが実現し、具体的な関わり方が分かることで、児童同士の話合いも増えた。

１．対象児童について

Ａ児　：Ｂ特別支援学校（聴覚障害）小学部４年生

２．活動のねらい

Ａ児は、両耳に補聴器を装用していて、環境音に敏感に気付くことができる。音声のみでの言葉の聞き取りは難しいが、口形を見ることで母音の弁別ができる。手話が主なコミュニケーション手段である。日本語を身に付けている段階であるため、言葉が分からず、困ってしまうこともあるが、絵を描いたりジェスチャーしたりする等、工夫して他者と関わろうと努力できる。年に３回、居住地のＣ小学校の通常の学級と居住地校交流を行っている。聴覚情報のみで学習に参加したり、指示を理解したりすることは難しいので、Ａ児の担任による情報保障（手話通訳、要約筆記）を通して、学習に参加している。話し方を工夫すればコミュニケーションが取れるということを実感し、積極的に誰とでもコミュニケーションを取ろうと行動してほしい。

３．事前の取組と配慮

Ａ児が、交流学級の児童との学習活動に自信をもって参加できるように、Ｃ小学校教員と連携して、居住地校交流実施日の時間割を調整した。できる限り、身体を動か

して活動に参加できる体育や音楽を取り入れたり、視覚教材が準備しやすい学習内容を選んだりした。また、事前の準備・予習が行いやすいように、各教科の指導において小単元の学習内容を扱うこととした。

居住地校交流に対するＡ児の不安や緊張をできる限り少なくするために、事前・事後に交流学級の児童と手紙のやり取りを行った。また、Ｃ小学校教員は、児童が簡単な手話や指文字を覚えられるよう環境づくりに配慮した。

総合的な学習の時間に、Ｂ特別支援学校教員による聴覚障害を理解するための学習をＣ小学校の同学年児童全体に実施した。補聴器の試聴やゲームを通して、聞こえにくい友達と話すときに気を付けることを考えた。「聞こえにくい友達が過ごしやすい学校は、みんなにとっても過ごしやすい学校になる。」ということを伝え、Ｃ小学校児童にとってもよいことであると伝えながら学習を進めた。

４．活動の様子と成果

交流及び共同学習の学年全体での総合的な学習の時間において、Ａ児自身から、Ｃ小学校児童に、聴覚障害があるために配慮してほしいことを伝えた。「筆談しましょう。」「分からないときは助けてください。」等、話すときの方法を伝えることができ、自分の障害に目を向ける機会ともなった。

国語では、書写の学習や短歌の発表会を行った。体育では、Ａ児が気管切開していることに配慮し、運動量の調整をした。音楽では、歌唱ではなく合奏を行った。総合的な学習の時間では、聴覚障害について理解する学習や手話コーラスを、Ｂ特別支援学校教員と披露した。大人数の前で話をしたり、発表したりする機会が少ないＡ児にとって、コミュニケーションの力を高める貴重な交流及び共同学習の場となり、人前で活躍できたことで自己効力感を得られたようであった。

写真１ タブレット型端末による筆談画面

また、身体を使った学習内容を増やすことで、交流学級の児童とも時間に差が生じることなく学習に参加できた。身体を使った内容は、自分で情報を得て活動内容を理解しやすいだけでなく、交流学級の児童も見本を示すことでＡ児の支援をしやすいようであった。

Ａ児は主として、筆談で交流学級の児童と会話をした。タブレット型端末の筆談アプリケーション（写真１）を自由に使えるよう、タブレット型端末を数台、教室前方に準備した。タブレット型端末の筆談アプリを使うと、スムーズに会話ができた。話合い活動では、Ａ児がいる班は筆談で行ったが、他の班と比べても、話合いの進み方に差はなく、むしろスムーズに行われていた。交流学級の児童にとっても情報をまとめやすかったようで、友達の意見を聞きながら自分の意見を言うことができていた。

Ａ児が、できる限りの情報を視覚から得られるよう学習内容や指示を、ホワイトボードや小黒板に書いて示した（写真２）。また、必要に応じて、Ｂ特別支援学校教員による手話通訳や要約筆記による情報保障を行い、教員の指示や学習内容の理解ができていない場合には、説明を行った。指示をホワイトボードに書いて示すことで、自分から学習活動に参加できることが増えた。必要な情報を得ることによって、自信をもって活動に参加できた。

写真２　Ｃ小学校教員がホワイトボードに指示を書いて示す様子

また、気管カニューレ部の痰の処理がしやすいよう、交流学級の児童が入らない部屋を準備した。別室を設けることで、周りの視線を気にせず痰の処理をすることができた。

学習面での成果は、事前に交流及び共同学習内容を確認し、準備・予習をしたことで、Ａ児が交流学級でも意欲的に学習に参加できたことである。Ａ児は挙手をして発表したり、既習事項を大勢の友達の中でもう一度学び直したりすることで、「分かる」という達成感が味わえた。

交流及び共同学習を重ねるにしたがって、交流学級の児童が手話に興味をもち、事前に簡単な手話を練習するようになり、手話での会話も見られた。当初は児童同士の遊びにおいてもＢ特別支援学校の教員による手話通訳の情報保障が必要であったが、お互いがコミュニケーションを工夫する場面が増え、Ｂ特別支援学校教員の支援が徐々に少なくなっていった。タブレット型端末の筆談アプリを自由に使える環境を整えたことで、「何をして遊ぶ？」「〇〇知ってる？」等の会話が増えた。外で遊んだ際には、近くに筆談する道具がなかったため、児童同士で工夫して、地面に指で文字を書いてやり取りしていた。このように工夫して関わる場面が、今後も続いていくよう支援していきたい。Ａ児は、話し方を工夫すればコミュニケーションが取れるということが実感でき、ますます積極的に誰とでもコミュニケーションを取ろうとする意欲が向上した。また、交流学級の児童は、手話や指文字に興味をもち、簡単な手話や指文字を使ったコミュニケーションも行っていた。交流学級の担任が教室に手話の本を常備していたため、交流を切っ掛けに、交流学級の児童が自発的に手話を身に付けていた。Ａ児にとって一番分かりやすいコミュニケーション方法が、交流学級の児童に広がったため、今後、より一層コミュニケーションが深まるのではないかと期待している。

３回目の時に学年全体の総合的な学習の時間に手話コーラスを行い、手話に親しむ機会を設けた。交流学級では、この手話コーラスを学習発表会で発表した。交流学級から学年全体、そして地域へと聴覚障害について啓発する機会を広げられたことは、地域で生活するＡ児にとって、有意義な試みになったと考えている。学習発表会を参

観したＡ児の保護者も、「聞こえない児童と聞こえる児童が交流できて、お互いにとっていい経験になったと思う。よかった。」と述べていた。

今後も、交流校の理解や協力のもと、児童がお互いを知る場、学習の理解を深める場として、交流及び共同学習を行っていきたい。

５．事後の取組、今後の課題

交流及び共同学習後のＣ小学校児童へのアンケートでは、「授業中は静かにする」、「話すときは一人ずつ話す」、「口が見えるように前から話す」、「話の最初にヒントを言う」の４点について、「守れた」と答えた児童がほとんどで、気を付けて話そうと努力したことが分かった。

また、学習した手話コーラスを、交流学年の有志の児童が、参観日の発表会で披露した。交流学級だけではなく、学年全体で取り組んでいる総合的な学習の時間を通して、Ａ児と関わりの少ない児童にも、聴覚障害の理解啓発を図ることができた。参観日当日は、Ａ児は休日であったため、Ｃ小学校を訪れ、発表を見ることができた。参観しているときに、交流学級の担任に飛び入り参加を促され、一緒に手話コーラスの発表を行った。保護者等にも、手話を理解していただくよい機会となった。

交流及び共同学習に際して、交流学級の単元の進度や順番の変更・調整を依頼することには課題も残った。Ａ児の学習の進度や理解できる内容は、交流学級の児童と異なっていたため、国語、算数、理科、社会等の教科学習を積極的に実施することができなかった。共に学習し、理解を深めることが理想ではあるが、交流当日は、交流学級の児童にとって学習の進み方が遅れたり、内容が深められなかったりした。今後、５、６年生になり、学習に差が出てくると考えられる。交流学級の担任や合理的配慮協力員との協議では、下級生と関わりをもつ時間（手話を教える）も設け、その間に交流学級は通常通りの教科学習を進める等、交流学級の児童にもＡ児にも負担が少なく、より授業内容が充実する日程を調整するとよいのではないかとの話も出た。保護者や本人の意見を尊重しながら、今後の交流及び共同学習の在り方を検討していきたい。